

生活書店の募金活動について

楊 韜

0. はじめに

生活書店は、近代中国、とりわけ日中戦争期において大きな影響をもたらした出版機構である。1932年に鄒韜奮(1895-1944)によって創設された。鄒韜奮は上海のセント・ジョーンズ大学を卒業後、中華職業教育社で週刊機関誌『生活』の編集に携わっていた人物である。中華職業教育社から独立して生活書店を創設した鄒韜奮は、引き続き週刊誌『生活』を発行した。その後、生活書店からは『新生』、『大衆生活』、『抗戦』など多くの出版物が次々に発行され、生活書店は近代中国の代表的な出版機構の一つとなった。本稿は、これまで言説分析を中心とした既存の生活書店研究(後述)を、その社会活動の側面(募金活動に関する考察)から補完する試みである。

本論の構成としては、まず先行研究の研究傾向を検討したうえで、1931年夏から1932年にかけての生活書店の複数回にわたる募金活動の全体像を描く。次に、そのなかの一つである東北義勇軍(馬占山)支援のための募金活動を具体例として取り上げ、その詳細な経緯を考察する。さらに、募金活動と生活書店の経営特色の関連性を分析し、生活書店の募金活動の特徴を明らかにする。

1. 先行研究の検討及び本稿の目的

これまでの生活書店に関する先行研究は、主に三つの側面に焦点が当てられてきた。すなわち、①生活書店の出版物における抗日言説に関する分析、例えば横山(1967)、石島(1971、1972)、斎藤(1981)、Coble(1985、1991)、神戸(2001)、神戸・田(2003)、張(2007)、楊(2008a)などが挙げられる。②生活書店の出版物にみられる都市住民の生活文化に関する考察、例えばYeh(1992、2007)、Mitter(2000、2004)、趙(2010)、高橋(2009)、楊(2009a、2009b、2011)などが挙げられる。③生活書店の創業者・経営者である鄒韜奮の思想変遷に関する検討、例えば郝(2002)、楊(2007、2008b)などが挙げられる。これらの先行研究のなかで、馬占山支援の募金活動に関する言及がみられるのは、石島(1971)、張(2007)などごく少数である。石島(1971)については、生活

週刊社が馬占山支援の募金活動について簡単に触れられているのみであるが、張（2007）では、「江橋抗戦」を考察しながら、生活書店の支援活動について比較的詳しく言及されている。しかし、張（2007）におけるデータには欠落箇所もあり¹、さらなる考察の余地があるものと思われる。

1931年夏から1932年にかけて、生活書店は複数回の募金活動を行っている。以下ではまず、その主な募金活動を時期順にまとめ、募金活動の全体像をつかむ。つぎに、この時期に行われた募金活動の中から、1931年の満州事変（九・一八事変）以降、東北義勇軍（馬占山）支援のために行われた募金活動に焦点をあてて考察を行う。なお、考察にあたっては、以下の諸側面に重点を置くこととする。①どのような歴史的背景の下で、募金活動が始まったのか。②どの程度の支援金が集められたのか。③どのような人／団体が献金したのか。④集められた支援金の扱い（管理、送金、集計、公表など）について、生活書店はどのような注意を払ったのか。⑤これらの募金活動にはどのような異同が見られるのか。生活書店によって公表されたデータ、及び当時の新聞や雑誌などによる資料を用い、これらの募金活動の社会的・政治的影響に関する考察も視野に入れる。

2. 生活書店の募金活動の全体像

前述のように、1931年夏から1932年にかけて、生活書店は複数回の募金活動を行っているが、そのきっかけとなったのは、1931年8月に発生した長江の大水害である。この大洪水は長江沿岸の複数の省にまたがった広い地域に甚大な被害をもたらした。その翌月には満州事件が勃発し、さらに第一次上海事変（一・二八事変）と続いたことから、これらの一連の出来事と連動した形で募金活動が連続的に行われた。これらの募金活動は、同時に行われたものもあれば、前後継続するような形となったものもあった。その概要を、以下の表1で示す。

表1 1931年～1932年における生活書店の募金活動一覧

募金活動のテーマ	活動期間	献金総額
長江大水害救済	1931年8月28日～ 1932年3月18日	29106元3角5分
東北義勇軍（馬占山）支援	1931年11月14日～ 1932年2月18日	129904元6角5分
十九路軍支援	1932年1月30日～ 1932年3月17日	30987元6角9分
傷兵医院 ² の設立と運営	1932年3月3日～ 1932年3月18日	15874元4角6分

出所：「關於本社經手各項捐款之声明」『生活』第7巻第12号（1932年3月26日）に基づき、筆者作成

3. 東北義勇軍（馬占山）支援のための募金活動

（1）募金の開始

周知のように、1931年秋ごろの中国は、政治的分裂の状態にあった。蒋介石の軍事独裁強化に反対し、同年5月王精衛ら反蔣派は広東に新国民政府を成立させた。一方、国民党と共産党の間にも、より深刻な対立が生じていた。馮玉祥・閻錫山らとの中原大戦に結着をつけた蒋介石は、共産党根拠地に対する第一次、第二次の「掃共圍剿」を行った。しかし、二度の「掃共圍剿」は失敗に終わり、1931年11月、毛沢東らによって江西省瑞金に中華ソビエト臨時政府が樹立されると、蒋介石はただちに30万の兵力を動員して、第三次「掃共圍剿」を開始した。このように、満州事変は、中国の分裂状態を背景に勃発したわけである。満州事変の勃発後、上海などの大都市を中心に日本製品のボイコット運動や反日ストなど、民間人による抗日運動が沸き起こった。共産党も日本の侵略に武装して抵抗するよう呼びかけた。しかし、こうした民衆の抗日運動の激発とは対照的に、蒋介石国民政府は不抵抗主義と国際連盟依存の政策をとった。東北軍は政府から「絶対不抵抗」を命ぜられ、一戦も交えることなく錦州に撤退した。³生活書店の募金活動は、このような状況のなかで始まった。

募金活動の開始にあたって、鄒韜奮は11月14日の『生活』の「小言論」欄に馬占山支援の背景について、「(一) 為民族争光的馬將軍」、「(二) 一党專政與一党專利」、「(三) 敬告義勇軍諸君」の連続記事を掲載し、馬占山支援の背景を説明した。⁴次に、隔週の「小言論」欄に鄒韜奮はふたたび連続記事の「(一) 我們何以尊崇馬將軍?」、「(二) 國際間的醜態畢露」、「(三) 敬告義勇軍諸君」を掲載した。また、同じ号に写真入り記事「為民族争光的馬占山將軍」を掲載し、馬占山の経歴を詳細に紹介した。⁵さらに「緊急告知」を掲載し、次のように周知した。

弊誌は発行周期が長い為、間隔日数が多い。迅速に弊社の黒竜江省戦士支援方針を周知するため、11月15日以降の申新両紙（『申報』と『新聞報』）にて告知広告を掲載した。16日の告知広告は天厨味精廠の無料提供、17日の告知広告は康元花鉄印刷製缶廠の無料提供、18日の告知広告は華安合羣保壽公司の無料提供によって掲載することができた。感謝の意を申し上げる。⁶

ここでは、生活書店が、他社の新聞紙面にどのような告知広告を掲載したのかを確認しておきたい。『申報』での告知広告は「生活週刊社為籌款援助黒省衛國健児緊急啓事」と題して、すでに寄せられた支援金の献金者／団体の名前とともに、次のように述べている。

馬占山將軍が率いる衛國健兒の抗日奮闘は、全国民衆に感動を与え、また国民の人心を大いに振興させた。しかし、孤立して戦う以上すでに兵士たちは食糧が尽きる緊急状態にある。軍事面での援助責任は政府に委ねるが、食糧などの救援責任は国民にもある。弊社は支援のための募金を開始する。⁷

この後、「第二次緊急啓事」から「第五次緊急啓事」までの告知広告が『申報』に掲載されたことが確認できる。⁸告知広告には毎回、集まった支援金の献金者／団体の名前が掲載された。献金者／団体は日々増加したため、11月21日から『生活』の誌面に掲載されることとなった。資料1は、集まった支援金の日単位の金額一覧表である。

そして、集まった支援金は、どのように馬占山へ送られたのか。当初の状況について、以下の記事「本社致馬將軍電」から見てみよう。

上海の新聞及び『生活』で募金を呼びかける告知広告を出した。そして、第一回は、15日に4000元を中国銀行、交通銀行を通して送った。その後、18日まで四回送った。合わせて44600元。会計師によってすべての領収証などを確認したうえ、後日『生活』誌面にて公表する予定である。⁹

その後、11月下旬の報告によると、中国銀行を通して38507元、交通銀行を通して16500元、合計55007元を送金した。¹⁰生活書店は、集められた支援金をいったん中国銀行や交通銀行に預け、定期的に馬占山へ送金した。また、銀行口座に預けたお金に対して生じた利息については、1931年年末に以下のような報告が掲載された。「12月22日から1932年1月4日にかけて集められた支援金合計12879元3角8分について、12月31日日付の中国銀行貯金の利息49元5角8分を得た。銀行手数料2元7角2分を除くと、実際の利息収入は46元8角6分である。これで、合計12926元2角4分となった。」¹¹

(2) 献金者について

資料2が示すのは、献金者名の一部である。ここからわかるように、主に五種類の人／団体から支援金が集められた。まず、もっとも多いのは一般個人からの献金であるが、この種の献金はおおむね小口献金である。「粵東女子」という名前の女性から2万5千円の献金があったという珍しい例もあるが¹²、ほとんどは数角単位から数十元のものである。なかには、小学生からのものもあった。第二に、民間企業からの献金である。様々な業種の企業から献金があり、その額についても数十元単位から数千元単位と幅広い。第三に、数は多くないが、地方政府及びその所属機関からの献金が見られた。理由はいまだ不明であるが、なかでも、とくに目立つのは湖南省政府及びその管下の機関である。

第四に、多くの民間団体からも献金があった。各種学校の抗日救国組織や各業界の組合組織が中心である。第五に、小学校から大学までの各種学校からの献金である。

この五種類の人／団体については、上海及びその周辺地域が全体の中心を占めているが、全国各地から寄せられた。北は北京、山東、南は貴州、湖南など広い地域に及んでいることがわかる。

(3) 馬占山「変節」及び「反正」をめぐる生活書店の対応

1932年2月に「変節」した馬占山は、4月3日に管下軍隊を巡視すると称して、ひそかにチチハルを出発して、4月7日に黒河に出現し、再び抗日の態度を表明した。馬占山寝返りの理由については、様々な推測がなされた。島田俊彦は次の四つを挙げている。すなわち、第一に、中国民衆から「軍神」と絶賛された彼が、「変節」後「売国奴」と呼ばれることとなったこと、第二に、全国から98万元にも達する陣中見舞金が彼のものと殺到したが、その返却を迫られたり、部下から分配を求められたりしたこと、第三に、無学文盲の彼にとって軍政部長という地位は負担が重過ぎたうえ、日本人文官に閣僚の席上で馬鹿にされたこと、第四に、省の公金800万元を使い込み、その点を日本軍部に糾弾されるのを恐れたことである。¹³馬占山の「変節」の真意やその経緯については、ここでは深入りはしないが、その際の生活書店の対応については明らかにする必要があるだろう。

馬占山が「変節」したと噂された1932年2月中旬、生活書店は馬占山へ電報を送り、その究明を求めた。電報には「もし噂が本当なら、馬將軍が生きていても死んだのと同様であろう。將軍一個人の生死は小さいことだが、中華民族にとっては大きな侮辱となる。非常に遺憾である。」¹⁴そして、3月12日の『生活』には瀋陽からの報告記事『馬占山の究竟』が掲載されたが、当時はおそらくまだ真相が明らかになっていなかったため、主に馬占山が困難な局面にあると論じられた。その後、馬占山は再び抗日活動を開始し、いわゆる「反正」した。それを受け鄒韜奮は、1932年4月23日の『生活』に『馬占山「反正」』と題する記事を掲載した。記事では、馬占山が一度「変節」したことについて批判されたが、「反正」した以上、彼を支援すべきであると述べ、また馬占山の「反正」が日本軍には大きな衝撃を与えたと論じている。¹⁵

(4) 募金の終了とその後：十九路軍支援へ

1932年1月16日、生活書店は『生活』誌面に募金終了の通告を掲載した。それは、馬占山が海倫からの電報を受けて下した決断である。馬占山からの電報には、「目下のところ自給可能であるため、こちらへの送金を停止して（長江水害の）被害者を救済しよう」と書かれている。¹⁶そして、生活書店はすでに送られてきた支援金については引き

続き馬占山へ送金するが、新規の支援金の受付を終了するとした。

しかし、雑誌の発行期間によって、時間差が生じたため、募金終了の通告を掲載した後も地方から続々と支援金が生活書店に届けられた。1月23日の『援馬捐款結束後之余聞』という記事に「1月16日終了の予定だったが、地方からの支援金は依然として届いている。1月18日までに合計126015元5角7分となった。」¹⁷と記している。

1月中旬に馬占山をめぐる噂が広がったことで、生活書店は『關於援馬捐款的建議』を掲載して、集められた支援金の残金（すでに馬占山へ送金した部分を除いた金額）を東北義勇軍への支援に回すという提案を出した。¹⁸その折に、第一次上海事変が勃発した。当時上海付近に配置されていた広東系の第十九路軍は、日本軍との激しい戦いを約一ヶ月の間続けていた。この状況を受け、生活書店は、支援金の残金を十九路軍の支援に使うことにした。3月5日の『援馬捐款結束方法』には、次のように述べられている。

この度上海での戦事については、幸いにも十九路軍の勇敢な抵抗があった。弊社がこれまでに募った馬占山支援金は、もともと抗日軍事活動のための支援金である。現在、十九路軍が緊急の支援を必要としているため、残金9897元6角5分を彼らへ送ることとする。献金して下さった皆様のご理解と同情を得たい。¹⁹

このように、最終的に、馬占山支援金の未送金分は、第一次上海事変の発生によって、十九路軍への支援に回ることとなった。

(5) 募金状況の公表について

生活書店は、募金開始以来、常にその状況の公表に注意を払っていた。献金者や団体の名前をすべて『生活』（最初は『申報』にも掲載した）の誌面に掲載し、公開した。のちにあまりにも膨大であったため、『生活』誌面の代わりに献金者リストを別刷の形で献金者へ郵送した。また、馬占山へ送金した後の受け取り状況についても定期的に報告した。たとえば、銀行からの領収書を写真付きで掲載した。²⁰『援助黒省衛國健兒捐款結束報告』と題した最終報告は、1932年7月23日の『生活』誌面に掲載され、同時に立信会計事務所 of 証明書も合わせて掲載された（資料4参照）。それによると、1931年11月14日から1932年2月28日にかけて集められた献金は129865元9分であり、銀行に預けて得た利息の49元5角8分と併せて、合計129914元6角7分となった。そして、銀行を通して馬占山へ送金したのはそのうちの120007元であった。一方、支出については、「電報費」が7元3角、「票力」²¹が2元7角2分であり、支出総額は120017元2分であった。そして、残りの9897元6角5分はすべて十九路軍支援に使われた。献金者名については、これまで『生活』誌面に掲載してきた。これまでの掲載には、生活書店

がすでに 2000 元の印刷出費がかかった。また、未掲載の献金者名については、別途郵送することにした。²²生活書店に集められた支援金のほとんどは「国幣」であるが、資料 1 で示したように、わずかではあるが、「外幣」（12 月 3 日）もあった。香港ドル（12 月 17 日）の献金については、「国幣」相当の額として計上されたが、「外幣」についての記述はなかった。12 月 3 日の「外幣 1 元外角 14 枚」について、どのように扱われたのかは不明である。

生活書店を通して集められた支援金は総額約 12 万元に及んだ。前述したように、全国から約 98 万元の支援金が馬占山に送られた。²³つまり、生活書店単独で 1 割以上の支援金を集め、馬占山へ送金したことになる。

4. 募金活動と生活書店の経営特色との関連性

当時、一つのメディア機関が単独でこれほど大規模な募金活動を行うことができたことは非常に稀なケースであると思われる。実際 1931 年から 1932 年にかけて、中国各地において様々な募金活動が行われたが、その多くは各種産業界団体組織によるものであった。当時の新聞や雑誌メディアはその募金活動を大いに報道し、ときには読者からの献金を転送することもあったが、生活書店のように自ら献金を呼びかけ、長期間にわたり組織的に行われた例はみられない。なぜ生活書店がこのような大規模の募金活動を成し得たのか。その要因は、生活書店の経営特色にあったと考えられる。

生活書店の前身は、生活週刊社時代にあった読者からの便りによって誕生した「書報代辦部」である。雑誌『生活』の投書欄「読者信箱」には読者から各種の相談の便りが寄せられた。そのなかには、地方では入手にくい新聞や雑誌、或いは新刊書籍などを代わりに購入して郵送してほしいという読者の依頼も多くみられた。当時の生活週刊社は、このような依頼にできるだけ応えるように、「書報代辦部」を設立させ、読者への「代辦」サービスを行った。その後、新聞や雑誌、書籍だけでなく、一般生活用品も対象となった。とりわけ、海外にいる華僑から様々な中国商品の「代辦」依頼が多く寄せられた。この「書報代辦部」時代に得たノウハウは生活書店の経営にも継承され、活用され続けた。1931 年の長江大洪水の発生後、姜昌後という読者から、次のような提案の便りが寄せられた。

私は一つ募金の方法を考えた。ただし先生（編集者）にはご迷惑とお手数をおかけしてしまうことになる。貴刊の「読者信箱」欄に献金の受付を設けて、読者からの自発的献金を集めることである。すべての読者が参与してくれないかもしれないが、

貴刊の膨大な発行部数と広い読者層なら、相当な献金を集められるのではないかと思う。²⁴

この読者は、さらに具体的な実施方法として、郵便切手での献金や現金振込献金、受け付けた献金について「読者信箱」欄で公表することなどを提案した。その後、生活書店の募金活動にはこのような提案が多く採用されることとなった。生活書店は、このような読者からの信頼を、事業発展の基本として認識している。鄒韜奮は以下のように述べている。

当店の発展は、広大な社会的信頼と同情を基礎にして構築されたものである。(中略)このような基礎があってはじめて、のちに数回にわたる呼びかけに大きな反応を得たわけである。一例を挙げる。馬占山將軍の抗日活動を支援するため、当店は募金活動を呼びかけ、大きな反応を得た。(中略)当時、上海市商会も募金活動を行ったが、献金者数や献金金額は我々に下回った。²⁵

そして、もう一点重要な特徴は、生活書店の会計師制度である。すでに前節で述べたように、生活書店は募金活動における献金の取り扱いについて非常に慎重であり、必ずすべての金額詳細を公表するようにしている。公表にあたって、会計師の役割は大きい。この特徴について、鄒韜奮は以下のように述べている。

当店には一つの特徴がある。すなわち、資金に関しては必ず会計師による帳簿の管理、証明書の開示を行うことである。『生活日報』²⁶の出資金とその利息の返還の時も、馬占山將軍支援の募金の時も、十九路軍支援の募金の時も、すべて上海の潘序倫会計師によって帳簿を管理し、間違いや不正がないことを証明している。また、会計師による証明を誌面にも掲載するようにしている。我々は、このような手続きが非常に重要で不可欠だと認識している。これは、読者からの信頼を得るため欠かせない手続きであるだけでなく、私個人もその恩恵を受けている。なぜなら、その後私の名誉を害する目的で、私が馬占山支援の献金を着服して書店の経営や外国での旅費に充てたというデマを流した人が現れた。しかし、私はまったく恐れなかった。すべての献金について、会計師による証明書を誌面に掲載したからだ。²⁷

このように、読者との強い絆によって築き上げた連携型の経営方式、そして会計師による明白な資金管理システムは、生活書店の募金活動に大いに貢献し、一つのメディア企業による巨額の献金集めを成功させた理由であると言えよう。

5. おわりに

以上、満州事変勃発後の東北義勇軍（馬占山）支援のための募金活動を具体例として取り上げ、1931年から1932年にかけての生活書店による募金活動を考察した。支援金は、主に一般個人、民間企業、地方政府及び所属機関、民間団体、各種学校から約12万元集められた。生活書店は、募金の詳細の公表について、常に注意を払っており、献金者や団体の名前をすべて『申報』や『生活』の誌面に掲載し、公開した。また、銀行からの領収書や会計師事務所の証明書なども写真付きで掲載した。その背景には、生活書店の前身である「書報代辦部」時代のノウハウを活用した経営特色があった。このメディア企業の経営方式上の特色が、募金活動の成功に結びついたのである。生活書店の募金活動に関しては、まだ細部に至る検証すべき点が多く残っている。たとえば、本稿で触れた献金者について、民間企業による献金の具体的分析（個別の献金金額、献金目的など）、地方政府／機関の献金の状況と背景（資金の由来、地方財政との関連）などを明らかにする必要がある。さらに、生活書店単独で全体の1割以上を占める支援金を集め、馬占山へ送金したが、ほかの約8割の支援金がどのようなルートで集められたかを明らかにすることは、生活書店の募金活動の意味を裏付ける重要な課題となる。これらの問題に関する検討を、当時中国全土におけるナショナリズムという大きな枠組みを念頭に置きながら、別稿に譲りたい。

注

1. 生活書店に集められた馬占山支援金の金額については、1932年1月20日分までが確認されているが、張（2007）には1932年1月12日から1月20日までの分が計上されていない。
2. 傷兵医院は、生活書店が第一次上海事変勃発後に設立した臨時的医療施設である。『生活』第7巻9号（1932年3月5日）の「生活週刊社附設傷兵医院啓事」及び、『生活』第7巻16号（1932年4月23日）の「生活週刊社傷兵医院留影」を参照。
3. 今井清一（1971）、286頁。
4. 『生活』第6巻47号、1931年11月14日。
5. 『生活』第6巻48号、1931年11月21日。
6. 同上。
7. 『申報』、1931年11月15日。
8. 『申報』、1931年11月16日、11月17日、11月18日、11月19日。
9. 『生活』第6巻48号、1931年11月21日。
10. 『生活』第6巻49号、1931年11月28日。
11. 『生活』第7巻1号、1932年1月9日。

12. 「粵東女子」という名前の女性は生活書店に訪れ、鄒韜奮とも面会したが、実名や出身地などを明かさなかった。
13. 島田俊彦（1966）、383頁。
14. 『生活』第7巻10号、1932年3月12日。
15. 『生活』第7巻16号、1932年4月23日。
16. 『生活』第7巻2号、1932年1月16日。
17. 『生活』第7巻3号、1932年1月23日。
18. 『生活』第7巻第4号、1932年1月30日。
19. 『生活』第7巻第9号、1932年3月5日。
20. 資料3参照。写真付きの領収書は、以下の誌面に掲載されている。『生活』第6巻第50号（1931年12月5日）、『生活』第6巻第52号（1931年12月19日）、『生活』第7巻第1号（1932年1月9日）、『生活』第7巻第2号（1932年1月16日）。
21. 「票力」とは、旧時「錢莊」が支払請求者から徴収した引換現銀運送手数料である。
22. 『生活』第7巻第29号、1932年7月23日。
23. 島田俊彦（1966）、383頁。
24. 『生活』第6巻第37号、1931年9月5日。
25. 『韜奮全集』第9巻、691頁。初出は『店務通訊』第51号、1939年6月10日。
26. 『生活日報』は、生活書店が1932年に創刊予定だった新聞である。一般読者から出資金を集める方式で、15万円の資金を集めた。しかし、当局に発行が認められなかったため、のちに集まった出資金及び銀行利息を全出資者へ返還した経緯がある。
27. 『韜奮全集』第9巻、738-739頁。初出は『店務通訊』第96号、1940年6月30日。

資料

資料1 生活書店に寄せられた支援金詳細
（『生活』に基づき、筆者作成）

年	月・日	金額	注	出所
1931年	11月14日	1685元	11月14日～17日、合計44666元4角4分	『生活』第6巻第48号（1931年11月21日）
	11月15日	2218元9角4分		
	11月16日	3875元7角1分		
	11月17日	36886元7角9分		
1931年	11月18日	8716元9角7分	11月18日～23日、合計26383元5角3分 これまでの合計：71049元9角7分	『生活』第6巻第49号（1931年11月28日）
	11月19日	16666元3角8分		
	11月20日	958元2角		
	11月21日	2534元3角8分		
	11月22日	1767元8角		
	11月23日	739元8角5分		

生活書店の募金活動について

	11月24日	3053元7分	11月24日～29日、合計9546元7角3分 これまでの合計：80596元7角	『生活』第6巻第50号（1931年12月5日）
	11月25日	3111元1角1分		
	11月26日	660元9角		
	11月27日	1092元5角9分		
	11月28日	1896元3角4分		
	11月29日	14元9角5分		
	11月30日	727元4角4分	11月30日～12月5日、合計12141元4角5分 これまでの合計：92738元1角5分	『生活』第6巻第51号（1931年12月12日）
	12月1日	2566元7角3分		
	12月2日	3569元8分		
	12月3日	3478元4角3分、外幣1元外角14枚		
	12月4日	1165元2角5分		
	12月5日	627元6角3分	12月7日～12月13日、合計7309元1角1分 これまでの合計：100046元4角6分	『生活』第6巻第52号（1931年12月19日）
	12月6日	0		
	12月7日	2018元6角6分		
	12月8日	1076元1角7分		
	12月9日	1649元2角1分		
	12月10日	34元3角		
	12月11日	471元1角5分		
	12月12日	1663元1角2分		
	12月13日	395元7角		
	12月14日	322元2角3分	12月14日～12月22日、合計7057元3角2分 これまでの合計：107103元7角8分	『生活』第6巻第年末臨時増刊号（1931年12月26日）
	12月15日	2046元9角9分		
	12月16日	683元8角9分		
	12月17日	1118元5角6分、うち国幣183元2角5分相当の香港ドルを含む		
	12月18日	1716元3角2分		
	12月19日	645元3角7分		
	12月20日	0		
	12月21日	181元9分		
	12月22日	342元8角7分		
追加	12月22日	2949元4角2分		
	12月23日	1223元5角2分		
	12月24日	2788元2角5分		
	12月25日	249元2角8分		
	12月26日	581元3角5分		
	12月27日	0		
	12月28日	437元		
	12月29日	419元6角9分		

	12月30日	3521元9角4分		
	12月31日	68元1角3分		
1932年	1月1日	0		
	1月2日	1元8角7分		
	1月3日	13元5角		
	1月4日	625元4角3分		
	1月5日	841元7角3分	1月5日～1月11日、合計3016元5角7分 これまでの合計:123046元5角9分	『生活』第7巻第2号(1932年1月16日)
	1月6日	640元6角1分		
	1月7日	294元4分		
	1月8日	334元1角9分		
	1月9日	20元		
	1月10日	0		
	1月11日	886元		
追加	1月11日	26元2角6分	1月11日～1月20日、合計5144元6角2分 これまでの合計:128191元2角1分	『生活』第7巻第4号(1932年1月30日)
	1月12日	391元5角		
	1月13日	668元1角5分		
	1月14日	504元6角3分		
	1月15日	817元4角		
	1月16日	25元9角4分		
	1月17日	0		
	1月18日	535元1角		
	1月19日	1339元2角4分		
	1月20日	836元4角		

資料2 献金者の一部

(『生活』に基づき、筆者作成)

一般人	粵東女子2万5千元
企業	五洲大薬房、三友実業社、天厨味精廠、天原電化廠、上海書局、上海無線電總台、万興国貨公司、康元花鉄印刷製缶廠、華成制帽公司、永安紡織廠、天章造紙公司、新華銀行、浦東電気公司、美亜保險公司、立信會計師事務所、南京大江百貨商店、公益染織廠、大業印刷公司、生生美術公司、香港西門子電機廠、新世界飯店、奧迪安電影公司、長沙新中華大旅社、鄭州豫豐紗廠、青島永泰和汽車行、中華煤球有限公司
地方政府 機関	南京市政府自來水工程処、湖南建設庁地質調査所、湖南省公安局、広州中山記念堂馥記工程処、湖南省政府
民間団体	大同大学抗日救国会、出版業工会、維昌洋行華員抗日会、上海美專学生抗日救国会、愛羣女中抗日会、蓮花市民救国儲金会、嘉定県立初級中学学生自治会、南通学院紡織科反日会、闵行婦女抗日救国会、首都工界抗日救国会、杭州女師同学会、中西餅業工会、中央大学商学院学生抗日救国会、浙江省水産科職業学校反日救国会、交通大学抗日会、九江光華中学抗日会

学校	上海工部局東区小学、南洋高商、上海中学实验小学、江蘇省立南京中学实验小学、同濟大学医学院、浙江省立民衆教育实验学校、上海市立暉橋小学、人和助産学校、安徽省立第四女子中学、蘇州東吳大学、湖南私立建国中学、広東梅県溪南学校、国民革命軍遺族学校、南洋中学、
----	---

資料3 領収書の一例

出所：『生活』第6巻第50号（1931年12月5日）



資料4 立信會計師事務所證明書

出所：『生活』第7巻第29号（1932年7月23日）



文献一覧

< 日本語 (五十音順) >

- 石島紀之「抗日民族統一戦線と知識人——「満州事変」時期の鄒韜奮と『生活』週刊をめぐる——前編」『歴史評論』256 (1971) : 22-50
- 石島紀之「抗日民族統一戦線と知識人——「満州事変」時期の鄒韜奮と『生活』週刊をめぐる——後編」『歴史評論』259 (1972) : 81-92
- 今井清一『太平洋戦争史 1 満州事変』(青木書店、1971)
- 神戸輝夫「日中戦争における文化侵略(3)——『抗戦』掲載「戦時教育方案」について——」『大分大学教育福祉科学部研究紀要』23.2 (2001) : 207-222
- 神戸輝夫・田宇新「鄒韜奮の抗日救国論——「満州事変」と「第一次上海事変」を中心に——」『大分大学教育福祉科学部研究紀要』25.1 (2003) : 31-46
- 斎藤秋男「『救国時報』と陶行知・鄒韜奮：“救亡=救国”運動研究のために(2)」『中国研究月報』401 (1981) : 1-8
- 島田俊彦『近代の戦争 第四巻 満州事変』(人物往来社、1966)
- 高橋俊「修養する青年たち——『生活週刊』と新しい労働観の生成」『野草』83 (2009) : 63-83
- 横山英「抗日運動と愛国的ジャーナリスト——鄒韜奮の活動と思想変革」『広島大学文学部紀要』26.3 (1967) : 171-189
- 楊韜「ジャーナリスト鄒韜奮とジョン・デューイ思想——近代中国知識人の一つのあり方」『メディアと文化』3 (2007) : 73-87
- 「「新生事件」をめぐる日中両国の報道及其背景に関する分析——差異と原因」『メディアと文化』4 (2008a) : 161-176
- 「1930年代における中国知識人の西洋理解——ジャーナリスト鄒韜奮の欧米体験を中心に——」『多元文化』8 (2008b) : 321-331
- 「近代中国における「国貨」をめぐる言説の一考察——雑誌『生活』(1925~1933)を通して」『現代中国研究』24 (2009a) : 62-75
- 「投書欄における読者・投稿者・編集者——生活書店出版物を対象とした歴史的考察」『中国研究月報』739 (2009b) : 13-25
- 「近代中国におけるセクシュアリティ言説——雑誌『生活』の投書欄における論争を中心に」『言語文化論集』33.1 (2011) : 167-180

< 中国語 (ピンインローマ字順) >

- 郝丹立『韜奮新論：鄒韜奮思想發展歷程研究』(当代中国出版社、2002)
- 趙文『生活週刊(1925-1933)与城市平民文化』(上海三聯書店、2010)
- 張洪軍「鄒韜奮的『生活』週刊与馬占山的江橋抗戰」『理論學刊』160 (2007) : 97-100

< 英語 (アルファベット順) >

- Coble, Parks M. "Chiang Kai-shek and the Anti-Japanese Movement in Cina: Zou Tao-fen and the National Salvation Association, 1931-1937." *The Journal of Asian Studies*. XLIV, No.2 (1985): 293-310
- . *Facing Japan: Chinese Politics and Japanese Imperialism, 1931-1937*. Cambridge: Harvard University Press, 1991.
- Mitter, Rana. *The Manchurian Myth: Nationalism, Resistance, and Collaboration in Modern China*. Berkeley: University of California Press, 2000.
- . *A Bitter Revolution: China's Struggle with the Modern World*. New York: Oxford University Press, 2004.
- Yeh, Wen-Hsin. "Progressive Journalism and Shanghai' s Petty Urbanites: Zou Taofen and the Shenghuo Enterprise, 1926-1945." *Shanghai Sojourners*. Ed. Jr. Wakeman, and Wen-hsin Yeh, Berkeley: Institute of East Asian Studies University of California, 1992. 186-238.
- . *Shanghai Splendor: Economic Sentiments and the Making of Modern China, 1843-1949*. Berkeley: University of California Press, 2007.

付記：

本稿は、2011年10月23日に近畿大学において開催された日本現代中国学会第61回全国学術大会で口頭発表した内容に大幅に加筆したものである。当日会場で質問やコメントをして頂いた方々に感謝したい。